



南方熊楠の學風

— 奇行で知られる世界的學者の眞の姿 —

桑原武夫

カワヤの神さま

私はカワヤの中では簡単にツバをはかない。という意味は、ツバをはきたくなつても自然にははけないで、そのためにはかすかながら努力感、といつては大ゲサだがそれに近いものが伴うのである。私は父の怪力亂神を語らぬという教育方針にもかかわらず、郷里越前の祖母から幼いころ色々迷信を注入された。その教えの一つに、大便所へ入る前には必ずセキばらいをすること、大便をしながらツバを絶対にはいてはならぬこと、というのがあった。私は幼時から理屈をいうことが好きであつたらしく、日本一の金持は三井さま、

一ばん強いのは辨慶と教えられたとき、それでは一ばん貧乏な人は誰か、一ばん弱蟲は何というか、と質問して手こずらせ、同時に祖母たちの寵愛をまましていたようだが、便所のことについても色々究明したらしいが、祖母はセキについては説明を與えず（或いは私が忘れたのかも知れない）、ツバの方については、カマドの中と同じように、大便所のツボの中には神さまがおられ、頭がすつかり禿げている。それでツバをかけられると怒つてタタリをされるといつた。禿げ頭にはなぜツバが禁物なのか、祖母は納得いくように説明できなかつた。しかし、子供が山の天狗にさらわれて金タライをたいたいてさがしにゆく、と

いつた話をよく聞かされていた私は、タタリは恐ろしく、便所でツバをはかなかつた。學校へ入つてから迷信打破を強調され、自分が迷信を實踐しているのが恥ずかしくなつて、自己變革を試みた。もちろんタタリはなかつたが、幼時に叩きこまれた信仰は根強いもので、ツバをはきたくなつても自然にははいていない。努力はもう必要ではないが、ツバをはくということが自覺作用として行われるのである。

人にすら今まで出會つたことがない（私の妻は例外である。彼女は私と同郷で遠縁にあたる）。したがつて、その理由など教えてくれる人もなかつた。ところが南方熊楠全集第三卷の『厠神』が、私の四十數年來の疑問に解答を與えてくれた。こと自體は重要なことではないが、かすかに感謝の氣持がわくのである。それは、藝術のもつての楽しみと一部分かさなるところがあるような、無償の行爲に對する感動のようなものといえよう。

人間と鬼神に知らしめるために、私が一人で考えていたように、日本の大便所は中からカギがかからぬから、不用意に戸をあけてはならず、一種の警報の役をはたすだけでなく、便所の神が不用意のときにいきなり上から汚物をその面の上に落すようなことがあつてはならぬからであるという。そして『毘尼母經』や『雜譬喻經』の經文が引用してある。ツバの方は、カワヤの神は、「一手で大便、他の一手で小便を受く、もし人廁中に唾吐けば神怒る」と明治初年和歌山でいわれたとある。越

前の老婆の信じていたことが紀伊のみでなく、インドにもつらなつていふといふことは、何となく陽氣な感じがしてよい。

奇人か學者か

また近頃の言語學の本には、人間が言語をもつのは人間社會の中で育つたから

であり、また赤ん坊がアババというような無意味な發聲をしているのは無用のようでは發聲器官のトレーニングになつているのであつて、もし人間の子が人間に育てられなければ言語をもたなくなるとして、ワイルド・チャイルド（野生兒。野獸、主として狼に育てられた子供）が、例證としてあげられている。その最も早い記録としては、一七九九年フランスのアヴェロンで見つかつた野生兒をイタールという青年醫師が教育して言語を教えこんだ報告がある（最近、『アヴェロンの野生兒』として古武彌生氏の譯が出た。牧書店）。醫師の獻身的努力にもかかわらずこの野生兒の言語能力はわずかしか發達しない。人間の子供はある年齢をすぎたら人間社會に奪い返されなくても、アババの練習不足のためもう手おくれなのである。その他いくつかの例を知つて私は大いに興味をいだいていたのだが、中學時代病床で愛讀した南方全集第一卷の『十二支考』の虎のところを十三年ぶりに読み返していると、ボールの『インドのジヤングル生活』にもとづいて、野生兒の例が數多くあげてあり、すべて狼などに養われた兒はものをいわぬことが指摘してある。さら



寫眞は故南方熊楠翁